

---

---

## ハンス・ベルメール作品における〈交換可能性 interchangeabilité〉をめぐって

### —ミル収容所でのマックス・エルンストとの共同制作から

松岡佳世（大阪大学）

---

---

ハンス・ベルメール（Hans Bellmer, 1902~75）はその人形に球体関節を用い、可動域を広げるとともに乳房や脚、頭を、その位置を入れ替えて増殖し、〈交換可能性 interchangeabilité〉をもつ新たな身体イメージを提示した。だが、こうした制作活動が知られつつあった矢先に第二次世界大戦が勃発し、このドイツ作家は「敵性外国人」とされ、元煉瓦工場であったミル収容所に抑留される。収容中、ベルメールは既に、最後の制作理論書ともいべき『肉体的無意識の小解剖学あるいはイメージの解剖学』（1957）を構想し始めている。この著作では、〈交換可能性〉は人形の身体部位にとどまらず、制作者と、その観察対象であった外部世界との関係性にまで拡張された。

このようにベルメールの中で〈交換可能性〉という考え方が拡張する造形活動上の萌芽の一つは、同時期にミルに収容されたマックス・エルンスト（Max Ernst, 1891~1976）との交流にあると考えられる。2人が収容所で同室であったことはよく知られているが、その共同制作の重要性についてはこれまで殆ど顧みられてこなかった。本発表の目的は、収容以降の両作家の制作活動の比較を通してベルメールの〈交換可能性〉という考え方の発展を検証することにある。

収容中、エルンストは、煉瓦作りのための道具をこすり出したフロッターージュを用い、《無国籍の人》（1939）と題したキメラを作り出した。足と頭しか持たないエルンストのキメラ制作は、ベルメール作品において脚と頭がじかに繋がった頭足類が1939年以降、際立ったモチーフとなったことと無関係ではない。それまでのベルメールの制作の文脈のみを考えた場合、この頭足類の登場は幾分唐突にも見える。しかし、2人の共同制作《創作、想像の産物》（1939）を見ると、この頭と足しか持たない不自由な生き物が収容時の二人の共通のモチーフであり、収容所の作家たちと外の世界の蝶番となる〈交換可能性〉のイメージであったことが窺える。

ベルメールは1941年に開始したボードレール『人工天国』の挿絵で初めてオートマティスムの手法としてデカルコマニーを使用し、エルンストが収容所で制作した女性のイメージを取り入れてもいる。エルンストがデカルコマニーによって自らの内部にある森や女性、キメラたちを発見したように、ベルメールは、この制作者のもとにやってくる偶然を観察・解釈する技法によって、それまで自らの外部にあるオブジェとして観察してきた女性の身体を自己の内部に見出したのだった。そしてそれは、作家もまた、観察される外部の対象すなわちオブジェへと「交換可能」な存在になりつつあることを示している。ミル収容所の煉瓦の粉塵と埃のなか行われたエルンストとの共同制作は、造形活動の積み重ねを経て、その後のベルメールの理論・技法を整えていたと考えられる。